

特集

## 美術館の“裏事情”!?

美術館の“裏事情”!?

### その① 美術館の舞台裏ツアー



書庫です。2万冊以上の美術関係書籍があります。

#### 1 書庫

まずは書庫です。ここには2万冊以上の美術関係の蔵書が収められています。この蔵書を利用して、作品の調査研究や、キャプションを作成したりしています。



#### 荷解場

これが「舟」。  
ここに作品をのせて運びます。

#### 2

次は荷解場です。ここには、他の美術館等から運ばれてきた美術品を運び入れ、展示室まで入れます。美術品を運ぶために、「舟」や「亀」と呼ばれる道具を使います。

#### ボイラー室

3つめはボイラー室です。ボイラー室は地下1階にあります。この部屋にあるボイラーで、館内の温湿度を一定に保って作品を最適な状態で管理しています。人間に例えるならば、このボイラーは心臓に当たる場所になります。



ボイラー室です。館内の温湿度を一定に保ちます。

次の出冊を持ってます



収蔵庫です。展示しない作品を収めています。

4つめは収蔵庫です。近代美術館には、約6,000点の作品があります。展示していない作品は、この収蔵庫で最適な環境で管理されています。もちろん地震で壊れないように、固定しています。

#### 収蔵庫

(副参事 佐藤克己)

### ワークショップ 要事前申込 「発見! びじゅつかん」 【美術館の舞台裏探検】

■開催日時:

4月29日(金・祝) 5月5日(木)

↑ 終了しました! ↓

7月23日(土)、9月4日(日)

ふだん見ることのできない美術館の舞台裏を、さらに詳しくご紹介します。ぜひご参加ください。また、学校・公民館等の団体観覧でも、ご希望があればご案内いたしますので、お申し込みください。

# 気の毒な彫刻/幸福な彫刻

当館にはこしみず小清水漸さんの作品2点があります。1つは《空へ 信濃川から》、もう1つは《Lapis Lazuri Garden》で、ともに舟をイメージした銅製の形態に水を入れた作品です。



小清水漸《Lapis Lazuri Garden》1989年

小清水漸  
《空へ 信濃川から》  
1995年

《空へ 信濃川から》は野外に恒久設置されています。1年中、新潟の過酷な季節の中を耐えているせいか、木の枝や葉っぱなどが舟の中へ溜まるのですが、よく見ると、自然の力で入り込んだとは思われない、巨大な石やゴミまであります。春になるまで掃除できませんので、下の写真のような状態で一冬を越えるのです。同じ作家の作品でありながら、何でボクだけと考えているかもしれません。本当に気の毒な作品です。



ゴミをとりぞいできれいになりました。

こんな大きな石が！  
作品を傷つけてしまいます。



《Lapis Lazuri Garden》はいつも4月になると、学芸員総出で倉庫から出して(すごい重量です)、春、夏、秋と企画展示室前の庭に展示し、冬、雪が降る前にしまします。ただ、去年は当館で急に「奈良と古寺の仏像展」を開催することになり、学芸全体が仏像展に掛かりきりで、しばらく展示できませんでした。そうしたら、いつも音声ガイドを担当される方から、あの作品は出ないのですか、と質問されました。仏像展開催中は難しいことを伝えると、とても残念な顔をするので、逆に聞いてみると、水を

張った舟が展示されると、鳥が集まってきてその水を飲みにくるのだそうです。その様子にとっても癒されるというお話でした。鳥を含めて多くの人々に愛されている幸せな彫刻だと思いました。

(学芸課長 藤田裕彦)

水を飲みに来た  
ジョウビタキ。



学芸員  
二人がかりで  
運びます。



作品の位置を決めているところです。

# いまどきの収集

美術館の収集といえば、かつては数億円の現代美術作品が収蔵されたなどという話題が新聞やテレビのニュースを賑わしたものでした。近年は、世間一般の不景気を反映してどこの美術館も予算を削減され、高額作品の収集の噂は以前ほど聞かなくなりました。当館も例外ではなく、2004年の中越地震もあって収集基金は凍結、作品を購入することができなくなりました。

これは美術館の成長をとめてしまう危機的な状況です。ただ、前向きに思考を転換すれば、予算がなければコレクションの充実が全くできないという訳ではありません。一つには、作品寄贈の有り難い申し出があります。また、コレクション形成上、どうしても必要な作品は、前年度からの予算要求(ごく少額に限られますが)により、獲得する道も切り開かれつつあります。平成22年度の新収蔵作品はまさにその2つの方法によるものでした。

購入された作品の一つにたかむら高村真夫《ラバクール村》があります。新潟県長岡出身の高村真夫(1876-1954)は、小山正太郎の



高村真夫  
《ラバクール村》  
1915年頃  
油彩・キャンヴァス

不同舎で学んだ後、官展を中心に活躍した洋画家です。新収品は1914年から16年にかけて欧州遊学をした際に描かれた、貴重な滞欧作品です。優美に蛇行するセーヌ河の流域には、ひなびた小さな村がいくつもあり、高村が訪れる以前から画家たちの格好の主題となっていました。モネにも同じ村を描いた風景があり、鳥のさえずりが聞こえるような、実にのどかな眺めです。しかし時は1915年。第一次世界大戦のさなか、近隣を軍用自動車が通過するのを高村も目撃しています。小さな作品ですが、歴史の大きなうねりを感じさせる1点です。(学芸課長代理 平石昌子)

# 平成22年度バージョン 「近代美術館の再生(雑感)」

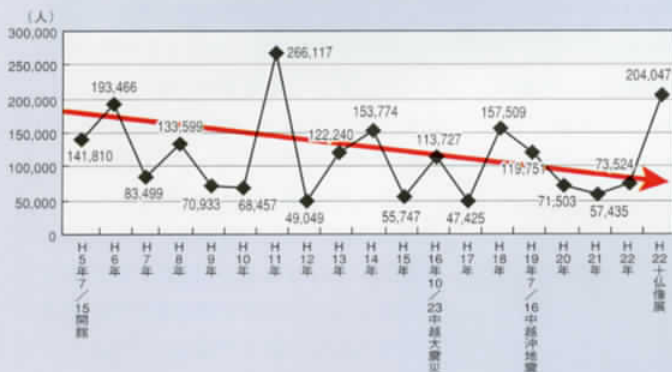
昨年は美術館勤務初年度に当たり、数多くの博物館(美術館)大会や研修会に参加することができました。その中で、一様に「社会の変遷の中で、多くの博物館が‘冬の時代’を迎えている。しかし、日本社会の向上のために‘新たな博物館づくり’を進めなければならない。」という指摘がありました。また、「ドロッカー理論のような経営の理念を持っている館は成功し、そうでない館は失敗している。」ということにも気付かされました。当館は、平成17年度末より‘魅力ある美術館づくりプロジェクト’が結成され検討に入っています。本年度も具体的な取組を進めているところですが、以下、再生を進める際の根拠や意図を簡単に記述したいと思います。

## 1 来館者数の変遷からみた近美の顧客状況と課題

表にあるように、オランジュリー美術館展や本年度の仏像展等の大型展開催年度も含め、全体的な傾向を眺めると、開館当初8万人平均であった顧客が最近では5~6万人と自然減少しています。おそらく「近美で有名な美術品を見る。」というファンの高年齢化が自然減少を招いたのではないかと考えます。今後、さらに‘顧客の創造’という視点からの正確な分析や新たなニーズの開拓が迫られています。



奈良の古寺と仏像展



なお、県費の年間展覧会費は、17年度以降は一千万円を上回ることがなく、大幅な不足分は、広報の充実も含め県内報道各社からの出資で補っています。また、美術館の使命の一つである収集は、16年度から基金が凍結され、停止状態となっています。

## 2 明確にしなければならない目指す近代美術館像

設立時の近美は、「素晴らしい建物・環境・収集品を持ち、併せて、国内外の優れた美術品等の身近な鑑賞を提供する日本屈指の美術館」というものでした。しかし、前述の‘顧客の創造’や教育委員会所管の施設ということを踏まえ、新たな‘近美像’を定め直す必要が生まれています。そして、全職員がその共通理解のもと具体的な取組を展開する必要があります。私自身は、従来の「多くの県民に鑑賞いただける良質な美術展覧会を開催する近美」に、

「地域と教育普及活動を大切にす近美、作品や他の人と美意識や感性を交換し高めあう‘学び’の近美」を加えなければならないと考えています。

## 3 近代美術館の運営に対する意識改革

少し前に、「美術館は作品の収集・保存と作品を守ることが最も大切なことです。」という話が館員からありました。もちろん使命の第一義ですが、その前提として、県民に愛され活用される美術館でなければならないとも考えます。その実現のために、各取組に対する具体的な意識や方向性を下記のように示しました。(要約を表記)

1. 第一義的には県の至宝を次代に残す。
2. 「目指す近美像」という目標・具体像を明らかにし、館員が共有する。
3. 「美術館像」を明確にした上で、諸事業の関連を図る。
4. 一つ一つの展覧会や事業の企画・分析表を鋭角的に作成する。
5. 企画・分析表を蓄積し、将来展開する展覧会や事業の基礎資料とする。その中で、「新潟県の文化レベルの向上」をいかに担うかを明らかにしてゆく。
6. 展覧会や事業の展開は、グループワークで臨めるようにする。
7. 学芸員の調査・研究を、地域の暮らしや歴史や文化の理解をベースもしくは繋がる骨太のものにする。
8. 展覧会や巡回ミュージアムが県の文化の再発見や向上に繋がるものにする。
9. 展示品・人(来館者・美術館員・来館者同士)の間でのコミュニケーションを重視する。(3WAY型美術館)
10. 地域や大学との共催型の美術展をより重視・発展させる。
11. 作家の滞在・交流・制作型の展覧会の組み込みを検討する。

## 4 まとめ

年度末には、館員の総意により、「利用者確保・拡充やより深い芸術鑑賞を実現し、新潟県民の文化レベル向上に資する」という全体目標と「豊かな心 彩発見!近代美術館(SAI)には再(再)という意味も込めて」というセールスポイントを策定することができました。

いずれにしても、冒頭の「再生の理念」と「施設・設備やレストランやショップや友の会も含めた近美資産全体の総合的な再生」の運用が喫緊の課題と考えています。(副館長 浅井俊一)

# いわさきちひろ展、 近美で開催決定！

## 皆さまのメッセージをお寄せ下さい!!

子どもたちの愛らしい表情や動きをやわらかな色彩で描き、多くの人に愛され続けている画家・いわさきちひろ。雑誌や絵本でもよく目にするその原画が今夏、いよいよ長岡にやってきます。

ちひろの絵には、母親や子どもたちの日常的な姿が優しい視線で描かれている一方、時には戦争への怒りや絶望を訴えかける強いまなざしを持った人物たちも描かれています。幼少時代に戦争を体験し、また、仕事と家庭を両立させる「自立した女性」としての生き方を自ら切り開いていった彼女の人生そのものが、作品の中に時として凜とあらわれ出てくるのかもしれませんが。

現在展覧会に向けて、出品作品へのメッセージを皆さまから募集しています。思い出の一枚、お気に入りの一枚、もしかするとお子さんにそっくり!という作品にも出会えるかもしれません。お寄せいただいたメッセージの一部は作品と一緒に並べて紹介するという、いわばお客さまとのコラボレーションのような展覧会になる予定です。



いわさきちひろ《緑の風のなかの少女》1972年 ちひろ美術館蔵

また、会期中6のつく日には、こどもが大好きだったちひろにちなんで、こどもたちやご友人とおしゃべりを楽しみながらご覧いただく時間をもうけることも計画しています。

メッセージで、そして展覧会場で、作品との対話をどうぞお楽しみください。

多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております!

メッセージ応募の詳細は、  
館内のチラシまたは当館ホームページをご覧ください。

## キンビの お・す・す・め

こんにちは。「キンビのおすすめ」について書かせていただくことになりました、元・囃子員です。何卒よろしくお願いたします。この春の美術館はどのような感じなのでしょう。賑わっているといいですね。桜が咲いているといいですね。

桜といえば、美術館の庭園近く、信濃川沿いに咲いている桜は毎年とても綺麗です。桜の道が出来ていて、ランナーの方やカ

メラを持った方をよく見かけます。晴れた日にはとても気持ちの良い場所なので、美術館を訪れた際はこちらもぜひご覧になってみてください。

また、美術館を訪れる時の楽しみのひとつに「ミュージアムショップ」があります。アートにまつわる雑貨や、他ではなかなか見ることの出来ない面白い物が多いのが特長です。当館のショップ「KINBI」でももちろんそうで、私がとくに気になるものは「昭和ちびっこ広告手帳1&2」です。昭和40年代のおもちゃ、お菓子などの広告を集めたハンディサイズの本です。登場する漫画キャラクターやキャッチコピーが妙におかしく、ページをめくる手がなかなか止まりません。私はこの時代を知らない人間ですが、この広告たちから当時の雰囲気やパワーを感じることが出来ます。ぜひお手にとってみてくださいね。

(元囃子員 山本咲恵)



昭和ちびっこ広告手帳1、2  
各1,260円



### 編集後記

美術館の「裏事情」!? いかがでしたでしょうか? 本号から「雪椿通信編集部」が紙面をお届けすることになりました…が、立ち上げ早々、編集部員のひとりが他館へ転勤になるという…そんな苦難を乗り越え、ようやく発行まで漕ぎ着けることができました。紙面は新しくなりましたが、近美の面白さや楽しさを伝えていく気持ちは今までと変わりませんので、今後とも雪椿通信をよろしくお願いたします。感想などもどんどんお寄せ下さい、お待ちしております!

(伊澤朋美)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第36号

編集・発行

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART  
新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14  
TEL0258-28-4111(代) FAX0258-28-4115  
http://www.lalinet.gr.jp/kinbi/ e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷

三条印刷株式会社  
〒955-0072 新潟県三条市元町9番3号 TEL0256-32-2281(代)

発行日 2011年5月10日